F2-28

湘南サナトリウムにおける近代メディカルツーリズムに関する研究
—(その 1)南湖院設立に伴う茅ヶ崎の発展に着目して—
Study on the Modern Medical Tourism in Shonan Sanatoriums
—(Part1)Focus on the development of Chigasaki with the establishment process of Nankoin—

○押田佳子[1]，横内憲久[1]，岡田智秀[1]，安齋七風[2]
* Keiko Oshida[1], Norihisa Yokouchi[1], Tomohide Okada[1], Tsukasa Anzai[2]

Abstract: In this study, we investigated the establishment process of the sanitarium ”Nankoin” .Conclusion, it was clarified that the expansion of Nankoin greatly contributed to development of next Chigasaki.

１．背景および目的—メディカルツーリズムとは，医療を目的とした観光形態であり，2007 年に閣議決定された観光立国推進基本計画において地域活性化を担うツールとして掲げられた「ニューツーリズム」の１つである．医療と観光が融合したまちづくりのあり方は，今後さらに進行するであろう高齢社会においてニーズがあるだけでなく，日本の高い医療技術を求めて来る外国人観光客を誘うツールとしても注目が集まっている．しかしながら，実施にあたり現行の医療法との間で生じる齟齬や旅行会社が負う責任問題についての検討不足，何より受け入れ地域側の態勢が不十分であることなどにより，他のニューツーリズムに遅れを取っている状況にある[1].

しかしながら，わが国は既にメディカルツーリズムの経験を有しており，近代に結核が猛威を奮った際に，その治療のためのサナトリウム(結核療養施設)が各地で建設され，それを核とした観光地が形成された経緯がある[2]. 今後のメディカルツーリズム普及に向け，上述した受け入れ地域側の態勢を整えるためにも，近代に各地で展開されたサナトリウムの設立経緯や患者の過ごし方，さらには地域との交流を明らかにすることは有意義であるといえる.

以上を踏まえ，本研究では近代に最多のサナトリウム群が形成された湘南地域において最大のサナトリウムであった茅ヶ崎「南湖院」に着目し[3][4]，当時のメディカルツーリズムの実態の把握を目的とする．なお，本稿では，南湖院の設立プロセスとそれに伴う茅ヶ崎の発展を明らかにする.

２．湘南サナトリウム群と「南湖院」の概要—近代における結核は，「国民病」と言わしめるほど流行し、恐れられた．このような状況下において、唯一の治療法とされたのが，サナトリウム(結核療養所)にて清涼な空気の下，静養し，栄養をつけることを目的とした「サナトリウム療法」であった[2]. 特に湘南地方は長与専斎により、温暖な気候が治療に適していると評されたことで，サナトリウム建設が積極的に進められ，明治 20 年代～昭和 40 年代にかけ 12 のサナトリウムが設置された．このような時勢の下，1899(明治 32)年に高田畊安によって茅ヶ崎に開設された南湖院は，最盛期には「東洋一のサナトリウム」と称される広大な施設となった[3](Photo1).

Table1 Outline of survey(研究方法)

調査方法	文献調査、ヒアリング調査
調査機関	2016 年 8 月 7 日～
調査対象	文献調査：「南湖院と高田畊安」，「「病床録」， ヒアリング調査：茅ヶ崎市市史編さん室担当者
調査内容	・南湖院設立に係わるプロセス ・設立に係わる反対運動の有無 ・近代茅ヶ崎の都市整備状況

3. 研究方法—研究方法の詳細を Table1 に示す.

4. 南湖院設立に係わるプロセス

南湖院の設立に係わるプロセスを Table3 に示す．プロセスは，南湖院に係わる歴史的特徴から「南湖院以前」「南湖院開設期」「南湖院拡大期」「南湖院衰退期」の 4 期に分類した．以降は，各期の特徴について述べていく.

4－１．南湖院以前(1898 年以前)—Table2-①より，明治 20 年代以前の茅ヶ崎は，相模川河口の半農半漁の小村であった．既に 1880 年代に鉄道駅の開業，別荘地化，洋風サナトリウム建設が進行していた，逗子，葉山，鎌倉，大磯は，所謂高級保養地の地位を確立していたが[5], 東海道の宿場がなかった茅ヶ崎では，別荘第一号である須田別荘の建設が 1896(明治 29)年であり，駅の開業も 1898(明治 31)年と 10 年ほど遅れをとっていた．このことより[3][4]，茅ヶ崎が湘南サナトリウム開発において後発組であったことが窺える.

4－２．南湖院設立期(1899～1909 年頃)—南湖院は，高田畊安が 1896(明治 29)年に東京神田駿河台に設立した東洋内科医院の分院計画がもととなっている．結核療養のための分院開設地を郊外に求めた結果，1896 年に茅ヶ崎村字南湖

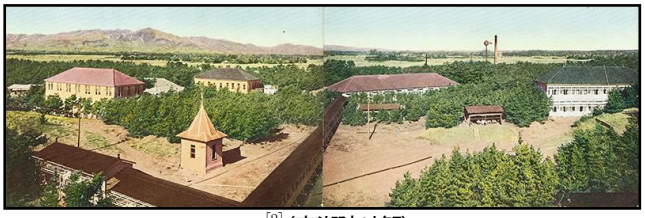

Photo1 Overview of Nankoin [2] (南湖院外観)

1：日大理工・学部・まち　2：日大理工・教員・まち

下に 5,568 坪の土地を格安で購入し，翌年には第一病舎が着工した[3][4]．　この時，鎌倉や逗子でみられたサナトリウム開設への反対運動はみられず，当時の村長によって，別荘地の売り込みとほぼ同時進行で，積極的に病院の受け入れが進められた[7]．南湖院開設に伴い，茅ヶ崎駅から南湖院までの道路の整備，駅の南乗降口開設（この際に南湖院の土地の一部を提供），など，周辺のインフラ整備が進められ，通称「病院通り」は，南湖院へ訪れる人によって，初期は人力車，終焉期にはタクシーの往来で賑わうほどとなった[7]（Table2-②）．

また，南湖院の入院費は，その立地から，鎌倉や逗子に比べ安くはあったが，約 4 円/1 日と，当時の白米 10kg 相当と高額であり，入院が困難な療養者のための療養下宿が建設されるなど[3]，南湖院に係わる新たな産業も展開された（Table3）．

4－3．南湖院拡大期（1910～1923 年頃）—1909（明治 42）年に本院である東洋内科医院において伝染病室反対運動が起こったことで，高田は本院移設や拡大を断念し，それらの建設資金を全て南湖院に投入し敷地を拡大した[7]．これにより，第五病舎をはじめとする 7 病舎，当時では珍しい病院独自の測候所，さらに南湖院の顔ともいえる医王堂など 10 棟が建設された[3][4]（Table1-③）．医王堂の竣工に伴い，医王祭（南湖院におけるクリスマス祭）などの地域を巻き込んだイベントを実施するようになり，「東洋一のサナトリム」南湖院が広く知られることとなった．

Table2 Establishment process of Nankoin（南湖院設立のプロセス）

	西暦（年）	和暦（年）	南湖院に係わる出来事[2][3]	茅ヶ崎に係わる出来事[2][3]
①南湖院以前		明治22		町村制施行に伴い茅ヶ崎村設立
	1896	明治29	神田駿河台に東洋内科医院開設	別荘第一号（須田別荘）
	1898	明治31	馬入川付近に分院設置計画を発表 10月：5,568坪の土地を購入	国鉄茅ヶ崎駅設置
②南湖院設立期	1899	明治32	3月：第一病舎（後の竹子室）建設着工 ・住吉神社から病院までの四町の道路を修築 ・住吉神社から六道の辻までの五町の道路を人力車が通れるよう修築 ・西園寺山の切通しを開削 ・電話線の開通（電話番号二番） 9月：第一病舎竣工　勝海舟未亡人ら3名が入 10月：私立病院としての認可が下りる	
	1904	明治34	第二病舎（宗正室）竣工	
	1905	明治38	第三病舎（守正室）竣工	
	1906	明治39	第四病舎（正道室）竣工	
	1908	明治41		茅ヶ崎に町制が敷かれる
	1909	明治42	東洋内科医院伝染病室反対運動	
③南湖院最盛期	1910	明治43	第五病舎（愛光堂）竣工※関東大震災で焼失後再	
	1912	大正元	第六病舎（盛義室）竣工	
	1913	大正2	洗濯所開設	
	1914	大正3	測候所開設 第七病舎（君乃室）竣工	
	1916	大正5	第八病舎竣工※東京の本院より移転改築	
	1917	大正6	第九病舎竣工※東京の本院より移転改築 第十病舎竣工	
	1918	大正7	医王堂竣工	
	1919	大正8		鐘淵紡績療養所建設計画（その後中止）
	1921	大正10	第十一病舎（念一室）竣工 関東大震災で第五病舎消失	
④南湖院衰退期	1924	大正13	愛光堂（仮本館）開設	
	1926	大正15	院長室竣工	
	1927	昭和2	第十二病舎竣工	海水浴場設立
		昭和5	隔離病舎竣工	湘南海岸公園化計画（案）の策定（神奈川県）
		昭和6	愛光室別館竣工	
		昭和7	徳太室竣工	
		昭和8	気楽室（経費病舎）	
	1943	昭和17		湘南遊歩道路完成 脇田病院反対決議書提出
	1945	昭和20	高田畊安院長死去	
		昭和20	海軍に接収され解散	

Table3 Regional Industry around Nankoin（南湖院周辺の産業）

業種	屋号（取り扱い商品）
旅館	茅ヶ崎館、魚民旅館、松屋、かさ屋、ほか
療養下宿（外来療養者用）	富士見館、松香園、ほか
食料品	青木（米・麦）、定源（魚）、養生館（肉）、八百久（野菜）、カギサン（味噌、醤油）、釜成屋・富貴堂（パン）、猪俣・雲出（牛乳）、鳥辰（卵）
日用品	林屋（雑貨）
燃料	小原（石炭）

4－4．南湖院衰退期（1923～1945 年以降）—南湖院拡大に伴う周辺地域の発展の影響は，別荘地や宅地開発にも及んだ．これらの開発は，南湖院によって茅ヶ崎に根付いた「結核のまち」のイメージを払拭する良い機会とされ，1927（昭和 2）年の海水浴場開設，神奈川県による湘南海岸の公園化計画，1936（昭和 11）年にはこれに先立ち湘南遊歩道路（現・国道 134 号線）が完成し，湘南海岸一帯の観光地化が急速に進められた[4][7]（Table1-④）．さらに近隣に建設予定であった脇田病院（結核療養所）に対する「反対決議書」が，県の都市計画課に提出され，その意向が認められた[4]．これにより，観光都市への転換を目指した茅ヶ崎町が，その後のまちづくりにおいて南湖院を含む結核療養所を不要と判断したことが窺える．その後，太平洋戦争において湘南海岸一帯が軍事上の重要地とされ，1945（昭和 20）年に海軍に接収される形で南湖院は終焉した（Table1-④）[4]．

5．小結—以上より，南湖院設立は，郊外の寒村であった茅ヶ崎をサナトリウムのまちとして発展させたことが捉えられた．一方で，南湖院設立によって発展した茅ヶ崎を中心とする湘南観光のみが，その後のまちづくりにおいて重要であり，サナトリウムが不要と判断されたことで，ここに近代メディカルツーリズムも終焉を迎えたといえるだろう．

6．謝辞

本研究は，日本学術振興会平成 28 年度科学研究費補助金（若手研究(B) 16K18833）の支援により実施されました．ここに謝意を表します．

7．参考文献

[1] 観光庁HP：ニューツーリズムの新興，URL: http://www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000044.html（2016.9.28 閲覧）
[2] 高三啓輔：「サナトリウムの残影・結核の百年と日本人」，日本評論社，p18，2004.1.15
[3] 大島英夫：「南湖院・高田畊安と湘南のサナトリウム」，茅ヶ崎市史編集員会，2003.3.31
[4] 川原利也：「南湖院と高田畊安」，中央公論美術出版，pp5～91，1997
[5] 島本千也：「海辺の憩い・湘南別荘物語」，島本千也，pp160～180，2000.1
[6] 上方屋平和堂製作：「南湖院全景絵葉書」，1935
[7] 茅ヶ崎市：「茅ヶ崎市史　第 2 巻，　資料編（下）」，茅ヶ崎市史編集員会，1978.3.31